



江戸時代末期、小藩分立により現在の大大分市域には5つの藩と幕府領が存在した。

## 小藩分立により「独自文化」が今も息づく

最盛期には、九州9か国中6か国を支配下に置いていた戦国大名の太田氏。しかし宗麟の子・義統の時代に、豊後国を豊臣秀吉に没収されてしまう。その後、徳川家康が天下を取り、豊後は関ヶ原の戦いの褒美として家臣たちに分配された。豊後の大名配置を大きく変えることで、大友の残存勢力を抑える目的もあったといわれている。豊後は小藩分立となり、現大大分市域に領地を持っていたのは府内・岡・臼杵・肥後・延岡の各藩と幕府領であった。

小藩分立は、地域独自の文化を生み、現在も祭りや伝統行事として受け継がれている。

鶴崎三大祭りと呼ばれる「本場鶴崎踊大会」「けんか祭り」「二十三夜祭」は、その名残をこども、今でも季節の風物詩として、地元の人たちに愛されている行事だ。

小藩分立になる前、まだ大友氏が栄華を極めていた頃、京都から踊り子を呼び、大友宗麟の前で踊らせたのが起源といわれる「鶴崎踊」は1560年頃に始まり、今も大切に踊り継がれている。小藩分立後、1646年に造営された劔八幡宮では、毎年4月に「けんか祭り」が行われる。当時の領主・細川氏からみこしが寄進され、今ではみこしを先頭に宝剣を飾りつ



よしくに 細川昭邦公初御入部御行列画図 (劔八幡宮所蔵)

1860年、肥後藩主細川昭邦が、熊本へ初入国した際の参勤交代の大名行列が描かれた絵巻。5月7日～9日に、鶴崎公民館で公開された。総勢1,231人が、長さ35mの絵巻に描かれ圧巻だ。



肥後一國(熊本)の支配を任された加藤清正は、豊後国内の領地が欲しいと望んだ。瀬戸内海への海路を確保するために獲得した鶴崎の他にも、野津原や久住など約二万五千石が、肥後藩の飛び地となった。この飛び地を繋ぎ、熊本から鶴崎まで参勤交代の街道「肥後街道」を造り、豊後国内では鶴崎、野津原、久住に御茶屋を置いた。御茶屋を中心に形成した「宿場町」は、参勤交代で陸路を旅した一行が、目的地へ向かう途中で

**〈参考文献〉**  
 大大分市史編さん委員会『大大分市史』  
 株式会社大分放送大分歴史事典刊行本部『大分歴史事典』  
 大大分市歴史資料館『江戸紀行～名所、名物、旅模様～』  
 鶴崎校区つるさき七輪の街づくり推進委員会『ふるさと鶴崎のくらしと歴史』  
 野津原町『郷土史野津原』  
 大大分市観光課『豊の都市 おおいた 歴史散歩』  
 山岡鉄舟『鉄舟随感録』  
 松浦玲『勝海舟』

**〈取材協力〉**  
 毛利空桑記念館 野村広幸 館長

体をとめ、英気を養う場所として繁栄した。

肥後藩の加藤氏・細川氏の参勤交代の旅路は、熊本から大津・内牧・久住・野津原と肥後街道を抜けて4泊5日で九州を横断し、鶴崎到着後は海路で瀬戸内海を渡り、大坂(大阪)に到着。その後は、東海道を江戸に向かっていった。これが当時、熊本から江戸までの最短ルートだった。船着場からは「波奈之丸」という御座船が大坂との間を行き来し、参勤交代の際、多い時では67隻が藩主の舟に付き従い、鶴崎の港から出た。

肥後藩の領地であり、御茶屋が設けられた野津原の宿場町は、七瀬川という天然の堀と山に囲まれ、防衛面にも優れていた。現在の野津原小学校がある場所に御茶屋があったとされ、熊本と鶴崎を結ぶ拠点のひとつとして発展した。

また、野津原地区では毎年8月23日・24日に「清正公祭り」が行われる。加藤清正を野津原神社にまつり、みこしや山車、神楽などに彩られるきらびやかな夏祭りだ。領主の加藤清正が人々に愛されていたことがうかがえる。

1874年、廃藩置県により豊後全域と豊前の一部は大大分県になった。江戸時代の小藩分立により独自文化が息づいた大大分市。各地域に残る祭りや伝統行事、文化財、史跡などが私たちの誇りである。



本場鶴崎踊大会

毎年8月20日前後の土・日曜日の夜に開催され、趣向を凝らした衣装をつけた踊り子が舞う、豪華絢爛なお祭り。



けんか祭り

山車同士が激しくぶつかり合うことから、この名称で親しまれている。山車の上に乗る、太鼓を叩きながら練り歩く様子は、訪れた人を感嘆させる。



二十三夜祭

船中で熱病にかかり亡くなった清正の船を、住人が提灯や灯火を持って出迎えたことから千灯明が始まった。



道中安全祈願塔

参勤交代の安全を祈願し、造られたもの。



今市の石畳

今市は岡藩の領地であったが、肥後藩も参勤交代の際にこの石畳の道を使用していた。660m程の石畳を、勝海舟と坂本龍馬も通ったとされる。

